

## 提 言

## 小児保健から思春期・高齢期保健へ

清水 凡生 (広島大学名誉教授)



おだやかな老後

写真提供 清水凡生

今年4月から高齢者の施設をあずかる仕事に従事している。仕事を始めて、高齢者と小児との身体的に共通する点の多いことを改めて知った。細菌感染に弱いこと、水分摂取が重要なこと、顔つきや表情の判断が大切であること、疾病時の症状発現、特に痛みが身体病変に比して軽微であること、局所的、臓器別な診療では正しい診断ができず、常に体全体を診なければならないこと等である。小児科的視点が極めて重要だということである。高齢者のQOL(生活の質)やADL(日常生活の活性)を低下させる三大疾病は高血圧、糖尿病、骨粗鬆症である。食習慣、骨の発育促進などこれら三大疾病を防止する方法は小児期からの保健指導の課題である。

思春期問題が乳幼児期に起因すること、疾病としても小児期からの連続性という意味で小児科医が診療すべきだと、機会あるごとに主張している。しかも思春期年齢が大幅に低年齢化し正に小児科年齢になっている。少なくとも思春期を視野に入れた乳幼児保健を考えることが必要である。

この写真は、当施設の入所者の方の一人である。家族の了解を得て掲載させていただいたが、穏やかな安らぎのある表情である。老後をあずかる施設としては、楽しい日々を送っていただくことに気をつけているが、このような表情の方々ばかりの施設であるべきだと考えている。

このようなことを考えると、小児科医は子どものみでなく、思春期、高齢期を将来担当していくべきではないかと提言したいのである。